

## 地域社会と世代

渡邊 勉

### 【要旨】

本稿は、地域活動と地域意識に地域差や世代差があるかどうかを検討する。その結果、地域差については、水平的な地域差は小さく、垂直的な地域差は大きいことがあきらかとなった。さらに世代差については、活動と意識において違いが見られることが明らかとなった。特に20代と30代、40代と50代、60代以上の3つの世代によって意識に違いがあることがわかる。そこで次に、活動と意識のずれの原因について検討した。その結果、ライフステージによって地域とのつながりが世代によって異なることで、地域意識と活動にずれが生じていることが明らかとなった。最後に本分析をふまえ、これからの地域社会のあり方について考察した。

キーワード 地域社会、世代、意識と行動のずれ

### 1. 地域と世代の問題

現在、地域および世代の問題は、人々の関心を集めている問題の一つである。図1は、朝日新聞の記事数の変化をあらわしている。1986年から2006年の期間、「地域格差」という単語を含む記事と「若者」かつ「規範」という単語を含む記事数の変化である。どちらの記事数も近年増えていることがわかる。

「似たような景色ばかりで、ここがどこなのか分からなくなるなあ」。今月中旬、盛岡駅を離れた秋田行き新幹線で、友人らと旅行中の関東在住の男性が車窓を眺め、つぶやいた。

日本の地方都市の風景はどこもよく似ている。幹線道路沿いにはコンビニやファストフード、家電量販店などおなじみの店が並

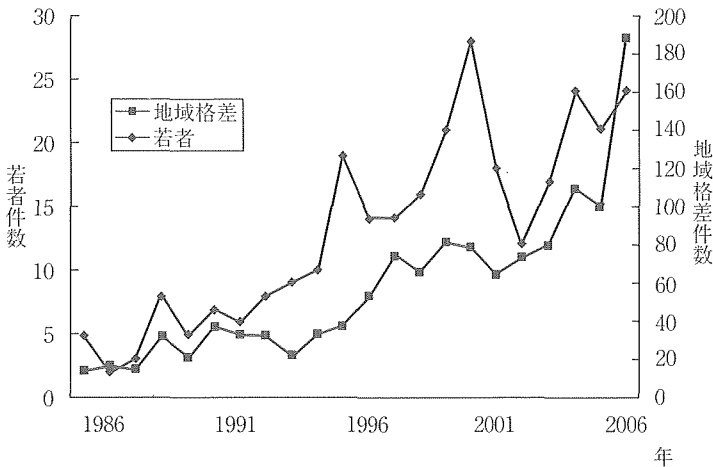


図1. 地域格差と若者に関する記事の変化 (朝日新聞)

び、駅前には消費者金融や語学学校の看板が目立つ。」(朝日新聞、2005年5月29日)

地方都市は、どこも個性を失い平板化していることを、この記事では指摘し、地域性が失われるという否定的側面を強調している。

一方、2007年3月6日の内閣府の発表では、2004年度の一人当たりの県民所得の地域格差は、3年連続で拡大したと発表している。また2007年1月から2月において内閣府が行った調査では、「医療・福祉」「教育」「地域格差」の3つの分野で「悪い方向に向かっている」と考える人の割合が急増していることが明らかとなっている。つまり、近年特に地域間の格差が大きくなっていると感じている人が増加しているのも事実である<sup>1)</sup>。

では、若者についてはどうであろうか。若者の問題で2000年以降急速に取り上げられるようになった代表的な問題に、フリーターやニートの問題がある。当初、この問題の要因は、若者の意識にあるとして

取り上げられることが多かった。若者の職業意識の未成熟や甘えがニートやフリーターを生み出しているのであり、若者自身の問題であるという認識があった。また、青少年の凶悪犯罪やいじめ問題の原因も、規範意識の低下に求める傾向が見られ、教育改革においては、若者の道徳・規範意識の向上を目指して、ボランティア活動などの奉仕活動の必修化などが取り上げられている。

しかしその一方で、最近ではニートやフリーターの問題は個人の問題ではなく、就業機会や労働需要といった構造的な問題であるという指摘もある（本田他 2006）。また、浅野編（2006）では、若者についてよく言われているような自己の不安定さ、道徳・規範意識の低さ、希薄な人間関係といった指摘が独自の調査では確認できないことが述べられている。つまり、若者はそれほど変わっていないとも指摘されている。

以上からもわかるように、地域と世代に関しては、それぞれ2つの矛盾する論調が併存しているのが現状である。なぜこのような異なる論調が共存しているのだろうか。実は地域や世代（特に若者）には二面性があるのではないか。

このような問題意識のもとで、本論文では、2006年に八十二文化財団と信州大学人文学部社会学研究室（渡邊勉）が長野県内でおこなった「郷土と文化に関する調査」のデータから、人々にとって地域とは何なのか、世代差とは何なのかについて考えてみることにしたい。その考察を通じて、地域ブランドの基底となる地域社会の活性化の可能性について検討していきたい。

## 2. 地域社会の現状

### 2.1. 郷土と文化に関する調査<sup>2)</sup>

調査は、2006年4月から8月にかけておこなわれた。対象者は平成17年10月1日現在、長野県内に住む20歳から79歳までの有権者のうち、3000名とした。調査は郵送法によりおこない、有効回答率は62.8%（1885票）であった。調査は大きく7つの項目群から構成され、文化、長野県に関する意識、地域に関する意識、地域活動、社会意識、属性、その他となっている。

実際の分析に入る前に、簡単に回答者の属性について確認しておく（表1参照）。

性別では、女性がやや多い。また世代では50代、60代がやや多く、

表1. 回答者の基本属性

変数	度数	%
男性	873	46.3
女性	1012	53.7
20代	194	10.3
30代	264	14.0
40代	303	16.1
50代	454	24.1
60代	375	19.9
70代以上	295	15.6
北信地域	614	32.6
東信地域	307	16.3
中信地域	447	23.7
南信地域	517	27.4

20代、30代が少なくなっている。さらに地域別では、北信地域が32.6%と最も多く、南信地域、中信地域、東信地域の順となっている。

## 2.2. 長野県の地域状況

最初に、本調査をまとめる意味で、本調査のデータから明らかになった県民の意識と行動のうち、特徴的な結果を示し、長野県の地域の状況を確認しておくことにしよう。

まず意識から見ていく。地域に対する意識として最も基本的な意識である愛着度について見ると、「愛着を感じている」と回答している人が49.1%、「どちらかという愛着を感じている」と回答している人が39.6%となっており、あわせると88.7%もの人が、愛着があると感じている。また犯罪に巻き込まれたときに近所の人々が助けてくれるかという質問に対して、72.4%もの人が助けてくれると回答している。つまり意識の面からは、地域社会は人々にとって大事なものとして認識されており、また地域の人々は信頼を寄せる対象であることがわか

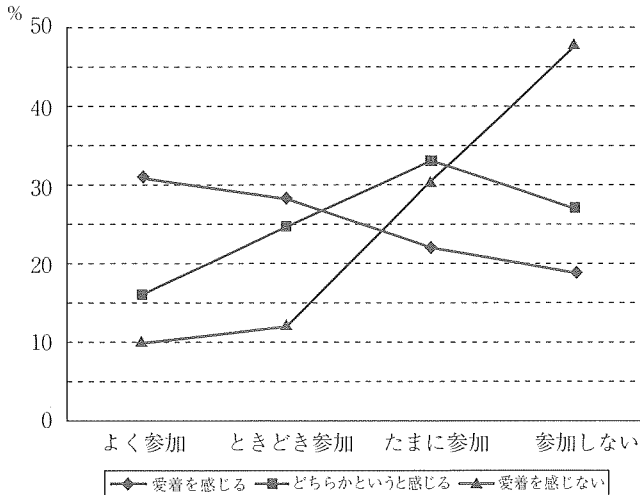


図2. 愛着度と町内会活動への参加

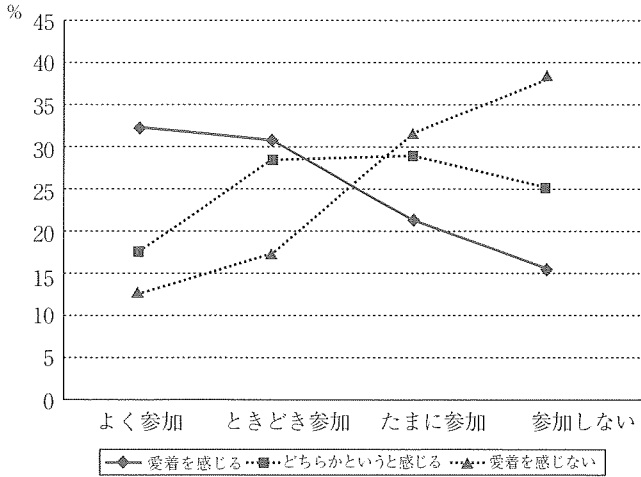


図3. 愛着度とお祭りへの参加

る。

しかしその一方で、地域社会への満足度を見ると、「犯罪や暴力の防止ができていないこと」、「社会のルールやマナーが守られていること」について、不満に感じている人（「あまり満足していない」「満足していない」と回答している人）が約4割おり、必ずしも地域に満足しているわけではない。

次に行動について見てみよう。町内会やお祭りによく参加する人は2割程度に過ぎず、必ずしも多いとはいえない（町内会活動は24.2%、地元のお祭りは22.4%）。

つまり、人々は地域に対して高い愛着と親近感を持っている一方で、地域社会の安全やルールの順守に満足しているわけではなく、また地域でおこなわれる行事に参加する人も多くない。それでは、人々は従来の地域活動ではなく、それにかわるボランティア活動に向かっているのだろうか。実はそれも正しくない。確かに、愛着度が高い人は、ボランティア活動をおこなう傾向がある。しかし、ボランティア活動

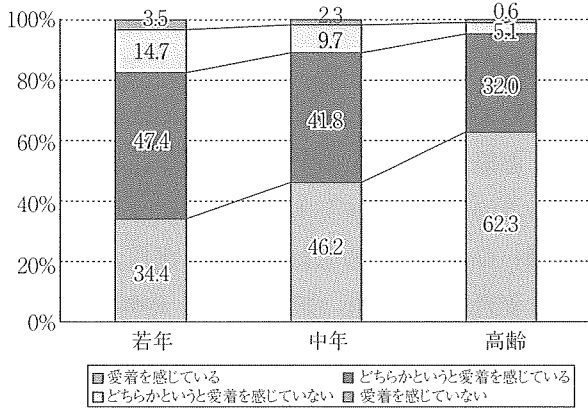


図4. 世代別愛着度

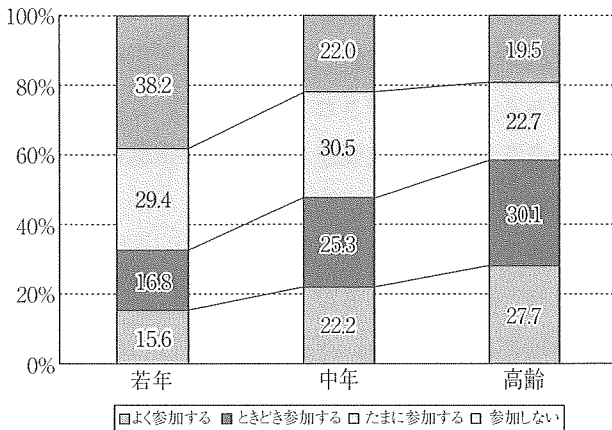


図5. 世代別お祭り参加の程度

に参加する人は、町内会活動もまたおこなうという傾向がある。つまり、町内会活動とボランティア活動は必ずしも補完関係にあるわけではない。

ここからもわかるように、意識と行動のギャップが存在するように見える。特に愛着度と町内会、祭りへの参加の程度のクロス集計を見ても、確かに愛着度が高いほど町内会への参加、お祭りの参加の

比率は高くなっている（統計的にも1%水準で有意）（図2、図3を参照）。しかし愛着を感じている（「愛着を感じている」「どちらかというとな愛着を感じている」と回答している人であっても、町内会に参加しない人、お祭りに参加しない人はそれぞれ2割程いる。つまり、愛着があるからといって、必ずしも地域活動につながるわけではない。

さらに興味深いことは、こうした傾向は、世代、地域によって異なる点である。まず世代別（若年（30代以下）、中年（40代、50代）、高齢（60代以上））に見ると、若い世代ほど愛着度が低く、地域活動への参加も低い（図4、図5を参照）。また地域規模別（規模別、詳しくは後述）で見ると、愛着度については地域による違いがなく、地域活動については大規模な地域ほど、参加が低いことがわかる。

このような傾向から、地域意識、地域活動と世代及び地域の間には、密接な関係があることが予想される。そこで、ここでは特に意識と行動のずれに焦点を当てて、地域差と世代差を議論の糸口としながら、長野県の現状について明らかにしてみたい。

具体的に、次の問いについて検討していく。

- (1) なぜ意識と行動はずれるのか
- (2) 地域差は存在するのか。存在するならばどのような差なのか。
- (3) 世代差は存在するのか。存在するならばどのような差なのか。<sup>3)</sup>

### 3. 地域差は存在するのか

まず、さまざまな意識、行動において、地域差がどの程度存在するのか確認しておく。前述したように、現在地域差は「ある」という論調と「ない」という論調が混在している。そのため、地域差の有無を取り上げるためには、まず地域差という概念を整理することからはじめる必要がある。

地域差といった場合、2つの次元から捉えることができる。第1に



表2. 地域別主要指標

		小規模	中規模	大規模	差	佐久	上小	諏訪	上伊那	伊那	木曾	松本	大北	長野	北信	差
人口密度	1994年	334.25	797.50	1703.09	1368.85	466.16	836.50	1069.24	577.05	599.25	246.84	827.17	239.50	1006.81	437.65	829.74
	2004年	314.18	800.03	1659.70	1345.52	455.79	870.56	1033.22	587.83	584.46	213.24	857.67	236.30	998.35	416.56	819.98
老年人口率	1994年	25.30	18.34	17.09	8.21	19.82	18.29	17.16	18.79	22.35	46.18	17.07	19.88	17.04	20.88	29.14
	2004年	31.24	22.25	22.47	8.99	23.79	22.97	22.35	22.97	26.88	31.55	21.23	25.38	22.17	26.35	10.32
人口増加率 (/1000人)	1994年	-1.19	8.31	2.03	9.49	5.99	5.73	1.40	5.04	0.97	-6.35	8.14	5.99	4.60	2.42	14.49
	2004年	-9.82	2.20	-2.51	12.01	0.84	0.28	1.08	0.35	-4.12	-14.48	0.87	-6.31	-1.78	-6.57	15.56
転入率 (/1000人)	1994年	42.63	50.45	45.48	7.83	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	2004年	37.32	52.04	45.24	14.73	46.22	45.92	54.24	57.30	39.75	40.85	56.36	42.24	35.78	32.01	---
転出率 (/1000人)	1994年	41.29	44.43	46.56	5.26	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	2004年	41.28	49.92	47.71	8.64	44.84	46.21	53.08	56.93	42.27	49.06	55.77	46.52	37.57	35.47	---
失業率	1994年	0.74	0.86	1.08	0.35	0.97	1.05	1.02	0.74	0.81	0.78	1.06	0.81	0.96	0.74	0.32
	2004年	1.30	1.72	1.96	0.66	1.80	1.83	1.82	1.59	1.42	1.29	1.81	1.72	1.80	1.54	0.54
第1次産業率	1994年	23.02	16.47	8.35	-14.68	18.46	11.53	7.99	12.40	26.53	12.64	12.41	13.40	13.19	18.46	18.54
	2004年	19.04	12.90	6.64	-12.41	14.99	8.79	6.55	10.10	15.03	9.66	9.41	10.23	10.45	14.99	8.48
第2次産業率	1994年	37.19	42.27	42.06	4.87	37.44	43.09	47.56	48.46	55.67	39.16	35.19	37.87	33.59	37.44	22.08
	2004年	42.27	39.66	38.71	5.28	34.85	40.04	43.92	45.72	36.19	34.77	32.38	34.36	30.50	34.85	15.22
第3次産業率	1994年	39.79	41.27	49.59	9.81	44.10	45.38	44.45	39.14	17.80	48.20	52.41	48.73	53.23	44.10	35.42
	2004年	26.74	25.76	29.39	2.66	50.17	51.17	49.53	44.18	48.78	55.58	58.21	55.40	59.05	50.17	14.87
病院・診療所率 (/10万人)	1994年	6.85	5.41	7.61	2.20	5.40	6.09	7.55	5.98	7.60	5.63	7.77	7.34	6.65	4.34	3.43
	2004年	7.82	5.78	7.99	2.21	6.20	6.66	7.51	6.62	7.63	5.97	8.43	7.51	7.46	4.98	3.45
犯罪率 (/1万人)	1994年	61.83	90.12	116.79	54.96	91.50	102.79	97.61	77.65	63.58	49.07	127.45	163.58	122.60	80.51	114.51
	2004年	103.78	128.71	145.10	41.32	134.47	149.09	134.92	124.56	123.57	89.06	172.42	151.58	142.48	159.30	83.36
地方債 (/1万人)	1994年	839.01	324.99	286.73	552.28	405.73	289.95	326.02	352.18	457.20	731.29	269.16	503.88	340.62	464.25	462.12
	2004年	1294.15	437.84	428.02	866.13	526.53	506.58	438.33	529.52	612.48	1102.44	434.58	754.28	499.25	634.04	667.86
公民館 (/1万人)	1994年	24.94	11.24	4.07	20.88	13.66	14.83	3.47	9.89	9.56	27.01	7.60	13.48	5.04	11.70	23.54
	2004年	28.27	10.63	4.03	24.24	13.36	14.28	3.59	9.67	10.97	30.60	7.57	14.87	4.89	12.45	27.01
社会体育施設 (/1万人)	1994年	33.64	7.74	6.87	26.77	9.28	6.39	5.80	10.74	12.53	26.11	15.42	13.33	7.50	6.89	20.31
	2004年	43.14	9.32	6.21	36.92	10.91	8.43	7.98	11.32	14.08	30.60	11.71	20.43	7.79	12.95	22.81

(注) 1994年と2004年のデータは、以下の年度の値を用いている。

可住地人口密度、老年人口率、人口増加率、転入率、転出率：毎月人口異動調査（1994年10月、2004年10月）

失業率、第1次産業就業者、第2次就業者、第3次就業者：国勢調査報告（1990年、2000年）

病院・診療所数：医療施設調査（1993年10月、2003年10月）

犯罪率：県警本部刑事企画課（1993年、2003年）

地方債：市町村財政概要（1993年度、2003年度）

公民館数：社会教育調査報告書（1993年10月、2003年10月）

社会体育施設：社会体育の現況（1993年12月、2003年10月）

北信、東信、中信、南信といった空間的な相違に基づく地域差である。もちろんこの空間的な違いには、単に位置が「近い—離れている」ということだけでなく、歴史、文化そして自然環境の相違などが含まれている。第2に規模に基づく地域差である。これは都市と農村（地方）といった違いによる地域差である。なお、本分析においては、規模の指標として人口密度を用いることにした。

さてこの2つの次元に基づく地域差について、客観的なデータから確認しておく。特に、人口、労働、産業、生活、文化の主要指標について見ておく。表2は、1994年と2004年（一部の変数は年がずれている）の主要な指標の、空間的な地域別及び地域規模別の値を示している。また差は、値の最も大きな地域と小さな地域における値の差をあらわしている。

### 3.1. 地域差

現在の地域差を見るために2004年のデータに注目してみた。まず空間的な地域差について、可住地人口密度は、諏訪、長野が高く、木曾や大北が低い。次に老年人口は木曾が高く、人口増加率では木曾が大きく減少している。転出、転入については、松本、上伊那、諏訪が高く、長野、北信が低い。

次に労働、産業、行政について見ると、失業率は木曾が低い。産業

分布については、第1次産業は北信、第2次産業は上伊那、諏訪において比率が高く、第3次産業は地域による顕著な違いはない。行政については、地方債の金額は、木曾が最も多く、松本、諏訪が少ない。

さらに生活基盤、文化についてみると、病院・診療所率は、松本が高く木曾が低い。犯罪率もまた松本が高く、木曾が低い。公民館数、社会体育施設数は木曾が極端に多く、長野、諏訪が少ない。

このように見ると、客観的指標からは、空間的な地域の違いは明らかに存在する。しかし、1994年と2004年とを比較すると、多くの項目で差が小さくなっていることがわかる（表内の差の部分参照）。顕著に差が広がっている指標は地方債のみであり、あとは差が同じくらい小さい。このことから、空間的な地域差は、多くの指標で減少の方向に進んでいると見ることができる。

### 3.2. 地域規模の差

地域の規模は、2004年時における規模（人口密度）を基準としている。小規模は650人/km<sup>2</sup>以下、中規模は1000人/km<sup>2</sup>以下、大規模は1km<sup>2</sup>あたり1000人を超える人口密度の地域と定義した。

まず人口については、小規模地域で老年人口割合が高く、転入率、転出率、人口増加率ともに低い。つまり小規模地域では、人の出入りが少なく、人口が減少している。同時に犯罪も少ない。産業は、小規模地域で第1次産業が多い。失業率は、小規模地域で最も低い。地方債額は、小規模地域が大規模地域の3倍ほどと多い。生活基盤である病院・診療所数は、あまり規模差がみられない。公民館、社会体育施設は、小規模地域ほど数が多くなっている。このように、規模別の地域差はかなりの程度存在していることが見て取れる。小規模地域は、公民館等の施設が充実し、失業率、犯罪率が低い一方、人口の減少に代表されるように停滞的である。また1994年と2004年の差をしてみる

と、多くの項目で差が広がっていることがわかる。

以上の結果をまとめると2つの重要な知見を指摘することができる。第1に、空間的な地域差も規模における地域差も現在もかなり見られるということである。第2に、空間的な地域差は縮小傾向にあるが、規模における地域差は拡大傾向にあるということである。

### 3.3. 分析結果

これらの空間的な地域差と規模別の地域差の現状を踏まえつつ、地域差がどの程度存在するのかを確認する。表3は、今回の調査で尋ねた主な意識、行動について、地域、地域規模、世代、性別において差があるのかどうかをまとめた表である（多元配置分散分析の結果、主効果のみ）。地域は、北信、東信、中信、南信の4地域、地域規模は、小規模、中規模、大規模の3分類とした。また世代は20代から70代までの6分類とした。<sup>4)</sup>

表3の特徴は2つにまとめられる。まず、第1の意味、つまり空間的な地域差による、意識、行動の違いは、少数の項目でのみしか見られない（9項目／38項目）。空間的な地域差にみられる数少ない項目の中で興味深いのは、投票行動である。これは詳しく見ると、北信と南信の間での違いであり、南信の方が北信よりも投票に対して積極的であるという結果となっている。しかし他の項目については、いくつかの項目において差が見られるが、傾向らしきものは見いだせない。つまり、先の客観的な指標において見られた差異とは異なり、人々の意識、行動のレベルでは空間的な地域差はあまり見られない。ただ10地域での分析をおこなっているわけではないので、単純な比較はできない。

次に第2の意味、規模による地域差については、逆に意識、行動の間での違いが数多くの項目で見られる（17項目／38項目）。特に、地

表3. 意識、行動の地域、地域規模、世代、性別差 (F値)

		地域	地域規模	世代	性別
地域意識	愛着度	0.72	0.74	15.99**	0.12
	近所の助け (犯罪時)	2.73*	10.94**	8.96**	6.68**
	近所の助け (災害時)	1.72	12.18**	17.15**	1.55
地域活動	挨拶人数	0.06	4.45*	33.70**	0.39
	町内会	2.43*	10.75**	61.54**	23.68**
	お祭り	6.21**	13.62**	15.10**	10.35**
	同郷人の会合	2.45	14.45**	21.38**	27.33**
	同窓会、クラス会	1.34	1.21	22.85**	3.66
	スポーツサークル	2.09	1.35	6.37*	20.48**
	文化・趣味サークル	2.60	0.11	28.62*	10.98**
地域環境評価	自然災害からの安全性	4.71**	14.54**	7.18**	2.30
	安心して通園・通学	1.74	5.48**	10.03**	6.75**
	犯罪、暴力の防止	1.51	1.69	4.83**	11.11**
	福祉サービスの充実	0.46	8.05**	18.23**	1.02
	買い物の利便性	0.65	21.20**	5.61**	0.06
	社会のルールへの順守	3.13*	0.19	3.37**	0.77
地域文化知識	建物、絵画、彫刻等	3.07*	0.86	13.75**	0.53
	郷土史	1.52	0.95	22.27**	25.21**
	伝承、民話	0.37	2.33	12.70**	2.59
	工芸、演劇、音楽など	2.13	0.20	10.27**	1.67
	祭り、年中行事	5.84**	5.85**	15.37**	2.84
	衣・食・住生活など	2.59	4.31*	10.99**	6.88**
ボランティア活動	関心の程度	1.76	0.18	11.39**	13.11**
	活動経験	0.03	3.01*	4.54**	12.05**
規範意識	しきたりの尊重	2.27	0.13	1.61	6.16*
	公共の利益の優先	1.88	1.73	15.06**	4.09*
	子どもの教育	1.16	0.18	11.00**	0.02
	年長者は敬う	0.06	0.02	5.83**	5.94*
	親の意向に従う	1.97	3.11*	7.93**	9.90**
生活意識	暮らし向き	2.55	2.21	5.32**	2.10
	生活満足度	0.94	4.53*	2.98*	3.15
信頼度	家族	0.36	0.38	1.32	1.51
	親戚	0.62	1.74	5.29**	1.18
	友人・知人	0.08	0.21	13.52**	0.28
	近所の人々	2.20	5.70**	10.97**	0.05
投票行動	市町村長、市長村議会	3.45*	7.41**	71.72**	4.09*
	県知事、県議会	5.87**	2.32	66.58**	1.65
	国会議員	4.67**	1.33	54.35**	0.06

\*\* p &lt; 0.01, \* p &lt; 0.05

地域は、北信、東信、中信、南信/地域規模は、大規模、中規模、小規模  
世代は、20代、30代、40代、50代、60代、70代/性別は、男性、女性

域活動と地域環境評価の項目のほとんどにおいて違いが見られる点が注目される。これら地域に関する意識や行動は、地域規模の影響が大きいことがわかる。また細かく見ていくと、地域規模の差は、小規模と大規模、中規模と大規模地域の間での相違が多いことが特徴である（結果は示していないが、多重比較の結果による）。このことから、大規模地域とそれ以外という関係が見られることがわかる。

以上の分析結果から、2つの事実を指摘できるだろう。第1に、多様性という意味での地域差（水平的な差）よりも、格差という意味での地域差（垂直的な差）において、差が顕著に見られる。客観的指標においては、空間的地域差による値の違いが明らかに存在したが、1994年よりも減少傾向にあり、多様性が縮小傾向にある。空間的差異は、近年のグローバル化の議論でも盛んに議論されているように、小さくなる傾向があると考えられているが、それは長野県においても同様である。空間的には、客観的な指標では差があるものの、人々の意識、行動においては同質的になっている。しかし同時に、近年の格差論議がそうであるように、規模による地域差は拡大傾向にある。このように考えれば、客観的指標と今回のデータに基づけば、最初に述べた地域に関する2つの論調は決して矛盾するものではなく、両立しうることが理解できる。

第2に、地域に関する意識、行動は規模の影響を受けているということである。逆に空間的な地域差はほとんど影響していない。空間的な地域差とは、おそらく歴史、文化、自然などに代表される地域固有の特性であり、人々の内面に影響を及ぼす可能性の高い特性が含まれていると考えられる。それに対して、規模の地域差とは、地域の物理的な環境の違いに代表される。つまり、地域に関する意識、行動は、人々の内面に影響を与える特性よりも、人々の生活に直接影響を及ぼす物理的な環境の影響が大きいのではないかと考えられる。このこと

から、都市と農村、平地と山間部といった違いが、人々の意識と行動を分けていると考えられる。

#### 4. 地域と世代

次に、世代の影響を地域との関連で見えていくことにする。

今回の調査から、地域と世代の関係について最も世代差がはっきりとあらわれている項目の一つは、県歌「信濃の国」に対する意識である。図6からわかるように、1996年と2006年の両調査の結果を重ねてみると、コーホート別で「信濃の国」に対する意識は、ほぼ一致する。つまり、「「信濃の国」の歌は好きである」、「県歌として誇りに思う」と回答する比率は、若い世代ほど低くなっており、その傾向は、年齢によって決まるというよりは、世代によって決まっている。

また地域の文化や歴史への関心も世代によって大きく異なる。図7は、地域の文化（4項目）について、「ほとんど知らない」と回答した回答者の世代別比率である。20代、30代が特に関心が低いことがわかる。

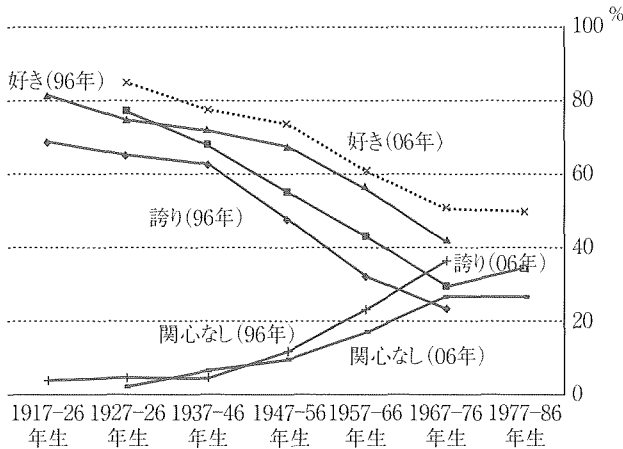


図6. 生年別「信濃の国」に対する意識

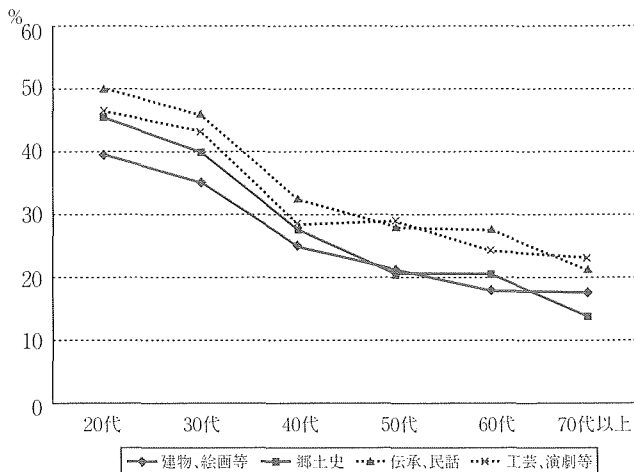


図7. 地域文化について「ほとんど知らない」と回答した人の比率

表4. 世代間の意識、行動のずれ項目数

	20代	30代	40代	50代	60代
20代	—				
30代	5	—			
40代	15	8	—		
50代	20	16	0	—	
60代	27	28	10	7	—
70代以上	29	31	16	15	2

なぜこのように世代差が生じてしまうのかについて、結論を先取りすると、世代によって地域とのつながりの違いがこうした違いを生み出しているのではないかと考えられる。

歴史や文化以外の意識や行動についても、世代によって大きく異なっていることが表3からわかる。38項目中、36項目において差が見られ、つまり地域活動、地域環境評価から、規範意識、生活意識まで多くの項目で差が見られる。差の内容を見ると、若年世代の意識が低い



場合が多く、活動もおこなっていないという傾向がある。ただ生活満足度、暮らし向きに関してのみ、20代、30代で肯定的な回答が多くなっており、他の項目とは異なる傾向を示している点が注目される。

さらに世代差が具体的にどの年代の間にあるのかを見るために、本調査の主な項目である38項目についてまとめたのが、表4である(表4の見方は、例えば20代と30代では38項目のうち5項目において差があることを示している)。

表3からは、それぞれ近接する世代では、年代差のある項目が少なくなっており、年代が離れるに従って項目数が多くなっていることがわかる。さらに年代の特徴を、より単純化するために似たような意識や行動を持つ世代をまとめてみよう。38項目の年代別比率から、クラスター分析(ward法)によって分類すると、20代と30代、40代と50代、60代と70代がそれぞれ一つのまとまりとなり、若年世代、中年世代、高齢世代の3つの世代に分けられる。

## 5. 地域に対する意識と行動はなぜずれるのか

2節では、長野県民の地域に対する意識と行動の間にずれがあることを明らかにしてきた。続いて3節において、地域差は主として空間的な地域差ではなく、規模による地域差が人々の意識と行動と関連していることを明らかにした。また空間的な地域差は減少傾向にあるのに対して、規模による地域差は拡大傾向にあることも明らかとなった。さらに4節で見たように、世代によって、地域活動、地域環境評価など、多くの項目において差があることが明らかになった。また6つの年代は、回答の傾向から3つの世代にまとめることができた。

以上の結果を踏まえて、なぜ地域に対する意識と行動はずれているのかという問題について考えてみる。そこで最初に世代別に意識と行動の関係を見てみる。

図8、図9は、3つの世代それぞれの愛着度別（愛着を感じる、どちらかという愛着を感じる、どちらかという愛着を感じない+愛着を感じない）の祭りへの参加の程度のうち「よく参加する」と「参加しない」と回答した人の比率をグラフにしたものである。この図からわかることは、まず中年世代、高齢世代では、愛着度があるほど、「よく参加する」比率が高まり、「参加しない」比率が低くなっているということである。愛着度（意識）と祭りへの参加（行動）は正の相関を持つという傾向が見られる。しかし若年世代では、「よく参加する」、「参加しない」のどちらともに、愛着度と祭りへの参加の間の関係は弱く、意識と行動の関連は、中年、高齢世代ほどは見られない。このことから、意識と行動のずれを生み出している大きな要因の一つとして、若年世代における意識と行動のずれがあるのではないかと考えられる。

さらに意識と行動の違いを明らかにするために、地域活動をする人とならない人との間でどのような違いがあるのか、地域活動をするということはどのような意味を持っているのかということを考えてみる。そのため、地域活動、具体的には町内会活動、祭り、ボランティア活動の3つの行動の要因から、ずれの原因について探求してみる。また若年世代と中年世代、高齢世代の間で、意識と行動の間の関係が異なることから、世代別に3つの行動の規定因を見ていくことにしたい。

3つの行動に影響を与える要因として、規範意識、近隣意識（愛着度、近所の人への信頼感）、属性（性別）、地域（空間的地域差、規模別地域差）、ライフステージ上の出来事（結婚、子供との同居）を取り上げる。これらの影響要因は、表5にあるように4つの大きな要因にまとめられる。

分析結果を読み取るためには、人々にとって地域社会とは何なのかについて、あらためて考えてみる必要がある。

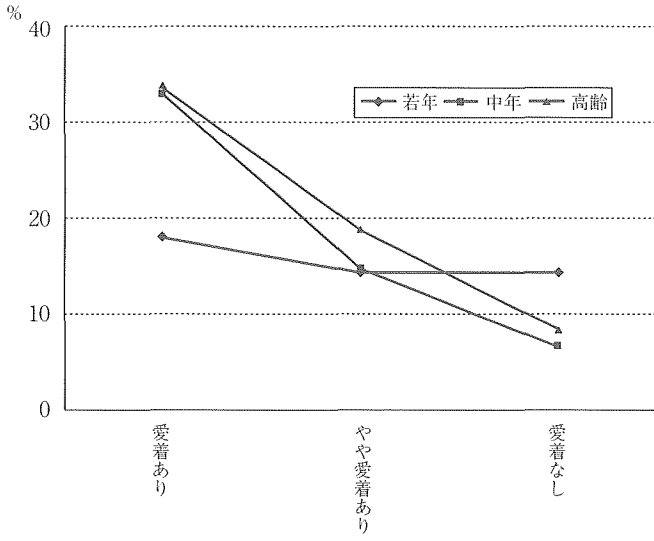


図8. 世代別、愛着度と祭りへ「よく参加する」比率

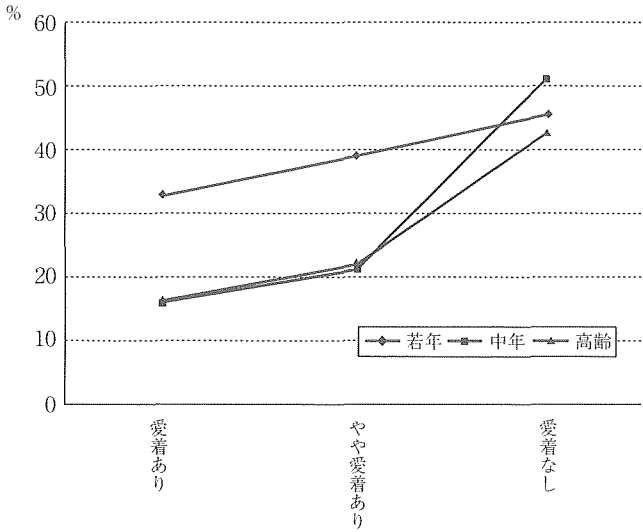


図9. 世代別、愛着度と祭りへ「参加しない」比率

表5. 地域活動への影響要因

	意識	ライフステージ	属性	地域（環境）
具体的な変数	規範意識	結婚	性別	空間的地域差
	近隣意識	子供	有職	規模別地域差

表6. 町内会活動、お祭り、選挙（市町村）、ボランティア活動への参加に関する共分散分析結果

説明変数	従属変数	若年	中年	高齢
規範意識 （しきたり）	地域活動（町内会）	0.45	1.39	0.46
	地域活動（お祭り）	0.68	1.18	0.08
	ボランティア活動	0.04	0.57	0.40
規範意識 （公共の利益）	地域活動（町内会）	0.40	0.79*	0.73
	地域活動（お祭り）	0.59	0.68*	0.68
	ボランティア活動	0.01	0.37	0.12
愛着度	地域活動（町内会）	0.36	8.29**	4.16**
	地域活動（お祭り）	0.68	14.40**	1.96
	ボランティア活動	0.64	4.49**	0.37
信頼度	地域活動（町内会）	8.21**	9.27**	7.64**
	地域活動（お祭り）	7.56**	8.64**	13.32**
	ボランティア活動	1.05*	0.89	2.92**
性別	地域活動（町内会）	7.11**	9.14**	8.73**
	地域活動（お祭り）	0.00	3.71*	14.96**
	ボランティア活動	2.01*	1.10	0.28**
地域	地域活動（町内会）	0.62	1.41	0.14
	地域活動（お祭り）	4.02**	1.34	1.59
	ボランティア活動	0.02	2.75**	1.42
地域規模	地域活動（町内会）	0.23	6.06**	0.16
	地域活動（お祭り）	0.43	7.10**	0.24
	ボランティア活動	1.56	0.84	0.63
結婚	地域活動（町内会）	4.95**	27.50**	1.90
	地域活動（お祭り）	2.46	11.45**	4.33*
	ボランティア活動	0.04	0.74	0.03
結婚	地域活動（町内会）	17.07**	3.19*	0.83
	地域活動（お祭り）	8.70**	7.65**	1.73
	ボランティア活動	0.00	11.52**	0.53
有職	地域活動（町内会）	1.31	0.96	0.49
	地域活動（お祭り）	0.13	3.23*	0.06
	ボランティア活動	0.06	2.38*	0.09

\*\* p &lt; 0.01. \* p &lt; 0.05

地域社会とは、地域住民にとって当然のことながら日々の生活の場である。それは、「今後どのような郷土文化について知りたいか」という質問に対して、「衣、食、住生活」が世代を超えて高い比率となったことから推測できる。つまり、世代に関係なく人々は衣・食・住生活の場としての地域社会に関心を持っている。ただ同じように衣・食・住に関心があるとしても、その内容は、世代によって異なると考えられる。

その違いは、分析結果から大きく2つ見いだされた。第1にライフステージによって作り出される違いである。

表6から若年世代、中年世代では結婚、子供の有無が、地域活動への参加を促している。それは、結婚、子供の有無（同居）が、PTAや子供会、町内会といった活動につながり、それが地域活動や地域のお祭りへの参加を促しているからだと解釈することができるだろう。これは結婚、子育てが生活に変化を作り出し、それが人間関係の変化、特に地域の人々とのつながりの変化を生み出すことで、地域活動に巻き込まれていった結果であると考えることができる。それに対して、高齢世代では、こうした影響はない。

ライフステージの影響に注目してボランティア活動の影響要因を見ると、結婚、子供ともに影響がない。ただし、中年世代においては子供の影響がある。このことから、町内会活動や祭りへの参加といった地域活動は、他の地域に関わる活動（選挙、ボランティア）とは、性質の異なるものであることがわかる。

第2に、世代によって、人々の生活における地域社会の位置づけが異なることが考えられる。若い世代では愛着度は、地域活動に影響を及ぼしていない。また中年世代では規範意識や地域規模が影響しており、職の有無も祭りの参加のみであるが影響している。

これらの結果は、各世代の地域社会の位置づけの違いから説明でき

る。つまり若年世代では地域とのつながりが薄いため、地域社会は自分の生活の背景になっている。背景としての地域社会は、自ら関わる対象ではない。そのため、地域への愛着度が地域活動へとはつながっていない。

中年世代では、やらなければならないという内的、外的な圧力が契機となって地域活動をおこなっている（逆に圧力を感じなければ、おこなわない）と解釈することができる。規範意識という内的な圧力がある人ほど地域活動に参加する。一方、若年世代においては地域活動が生活の背景に後退しているので、規範意識は関係がないということである。また地域規模については、地域規模の大きさは、流入率、流出率と関係があることが先の客観的な指標による分析からわかっている。流入率、流出率が高いということは、地域社会内の人の移動が激しく、地域社会の変化が大きいということの意味している。そのため地域活動への参加に対する外的な圧力（近所の人もやっているのだから自分もやらなければならないといった義務感）は小さくなる。逆に小規模の地域では、移動が少なく、外的圧力があると考えられる。もちろんその圧力は、内面化された意識において感じるものに過ぎないので、圧力を感じるかどうかは、本人がどれだけ地域社会にコミットしているか、あるいは巻き込まれているかによって異なると考えられる。中年世代において地域規模が影響しているということは、中年世代の方が若年世代よりも地域社会に巻き込まれており、義務感によって地域活動をおこなっているからだと考えられる。同じように職の有無の影響も説明できる。雇用の有無の影響とは、自由な時間があれば地域活動をし、時間がなければしないということである。地域に巻き込まれていなければ、時間があろうがなかろうが関係なく、時間があれば活動するという姿勢は、地域社会に巻き込まれていることのあらわれであると考えられることができるだろう。

ボランティア活動については、地域活動とは異なる傾向を示している。地域活動が圧力による行動という側面が強いのに対して、ボランティア活動は自発性の側面が強い。そのため、愛着度は影響しているが、規範意識、地域規模については影響していない（4地域の影響があるが、それについてはここでは言及しない）。

高齢世代の地域活動は、実は若年世代とやや似た傾向を示している。規範意識、地域規模は影響しない。雇用の有無も影響しない。ただ若年世代と大きく異なるのは高齢世代では、愛着度が影響しているという点である。つまり、愛着度があるから地域活動をしているという関係がある。そのため、若年世代と似たような影響関係を示しているが、その意味は全く異なる。

若年世代では、地域社会は生活の背景として位置づけられているだけで、さまざまな変数は影響しない。一方、高齢世代は地域社会が生活の前景に出てきているために、影響がない。つまり、地域活動をおこなうことが生活の一部となっているために、規範意識のような意識、地域規模のような環境要因とは関係なく参加することがあたりまえとなっているといえる。もちろん高齢世代でも地域活動しない人は少なからずいるのも事実である。しかし、地域活動をする人とならない人の間に意識、行動において大きな違いはなく、地域活動をする人にとってその行為は、かなり当たり前のことであり、特別な要因が影響を与えているわけではない。それは例えば朝、顔を洗う人と洗わない人がいて、そこにどのような違いがあるのか考えてみるとわかるかもしれない。顔を洗うかどうかは、もはや当たり前の日常であり、特段何かが影響してやっているわけではなく、毎日やっているから（やっていないから）そうしているのであり、内的要因、外的（環境的）要因が影響しているわけではないに違いない。高齢世代にとっての地域活動とはそのようなものなのではないだろうか。

世代によって地域社会とのつながりは実際に異なるのか。世代別の地域社会の人々とのつきあいの程度を見てみると、図10のようになる。

あきらかに、若い世代において、隣近所の人々との付き合いが少ないことがわかる。また2005年に信州大学人文学部社会学研究室がおこなった「地域活動と住民意識に関する穂高町民調査」によれば、若い世代ほど近所の人と家庭、仕事など個人の話題について話す人の比率が低いこともわかっている。こうした事実から、若い世代ほど地域の人々とのつながりが少ないことがわかる（村山研一・渡邊勉編 2006）。

また地域への関心の程度から地域とのつながりの程度を見てみよう。本調査では、6つの地域環境の側面について「満足している」から「満足していない」までの4段階で尋ね、それとは別に「わからない」という回答を設けている。この「わからない」への回答に注目すると、地域環境への関心の低さがうかがえよう。6項目の地域環境について、「わからない」の回答比率を示したのが図11である。また各世代の

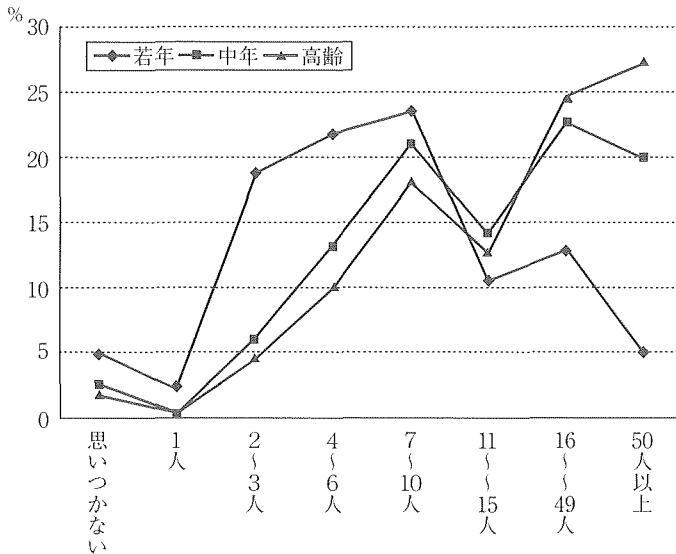


図10. 世代別、隣近所の付き合い



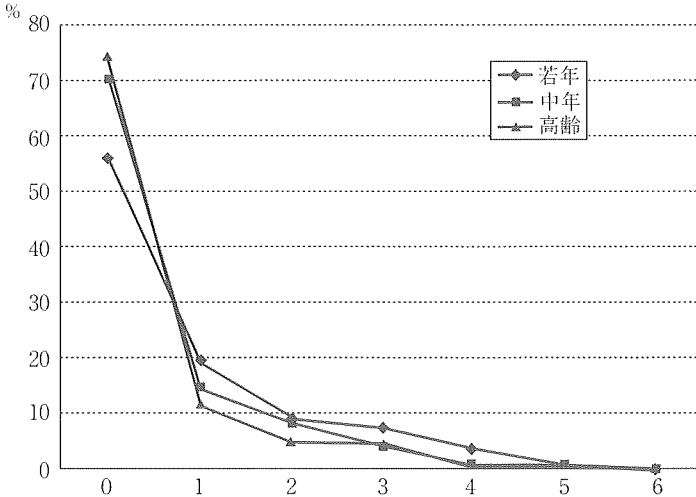


図11. 世代別、地域環境の認知度

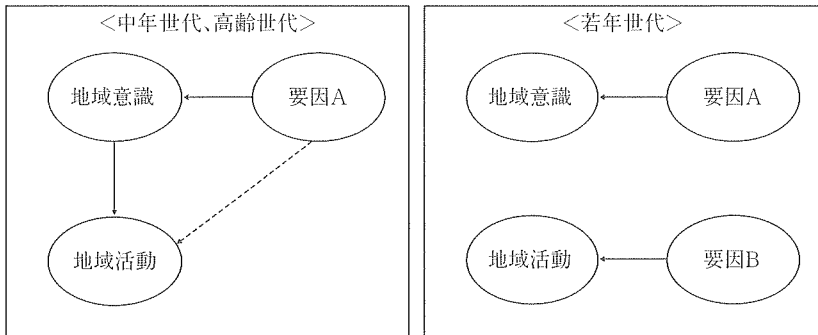


図12. 地域意識と地域活動の関連図

「わからない」と回答した平均回答数は、若年世代0.91、中年世代0.52、高齢世代0.51となっており、若い世代において高くなっている。

このことから、若い世代において地域環境自体を評価することができない人が多いことがわかり、それは、地域それ自体への関心の低さの表れであると考えられる。また、3節で述べたように、若い世代ほ

ど地域の歴史、文化に対する関心も低い。こうした事実から、若い世代において、地域とのつながりが薄く、関心も低い。そして地域活動への参加も低い。その一方で、愛着度は高い地域とのつながりが薄いという事実があらわれてくる。

以上をまとめると、地域とのつながりのあり方によって、地域に関する意識と活動の間関係が変わってくるのがわかる。図12はその関係を示したものである。若年世代では、愛着度と地域活動は異なる要因 A、要因 B によって決まっており、愛着度と地域活動は関係ない（要因 A、要因 B がなんなのかについてはここでは問わない）。それに対して中年世代、高齢世代では、要因 A が愛着度に影響し、さらに地域活動に影響を与えていると考えられる。もちろん要因 A は直接地域活動にも影響しているかもしれない。

## 6. これからの地域社会

最後に、以上の分析を踏まえて、これからの地域社会について考えてみる。

これまでの分析から、世代によって地域社会に対する態度が異なることが明らかとなった。そして必ずしも、地域に愛着があるからといって地域活動に参加するわけではないことが明らかとなった。

こうした分析結果から、地域活動への参加を促進するためには、いかにして地域社会に人々を巻き込んでいくか、その仕掛けが必要であると思われる。別の言い方をすれば、いかにして地域社会のソーシャル・キャピタルを増大させればいいのかという問題につながっている（内閣府経済社会総合研究所編・2004；宮川・大守編 2005；岩崎 2005）。大部分の人は自分の住む地域に対して愛着を抱いていると考えられ、地域活動への参加の素地はあると考えられる。愛着や信頼感といったものをいかにして、活動に結びつけるのかという回路が必要であるに

違いはない。若年世代にとって結婚、出産、子育てといったライフステージにおける変化は、地域活動につなげる一つの回路になっている。しかし、結婚や子育ては個人に帰属する意志決定であり、他人が関与する問題ではない。

また若年世代において、必ずしも規範意識が低くはないことも事実である。世代によって規範意識の違いはあるが、若年世代が極端に低いというわけではなく、規範意識を持つ人も多い。こうした点からも地域活動に結びつける回路があれば、多くの若年世代が参加する可能性はあるに違いない。

しかし、地域活動への参加問題以前にここで考えなければならないのは、町内会活動や祭りなどの地域活動に地域住民みんなが参加することが地域にとって最も望ましい状況と言えるのかどうかということであろう。町内会活動や祭りへの参加（さらにはボランティア活動も含む）といった活動は、地域社会、さらには地域社会で生活している人々にとってプラスの効果をもたらすものという前提があった。近年の災害や防犯、あるいは福祉などの問題に対して、地域社会が担うべき役割が問い直され、人々の積極的な活動によって、これらの問題を解決していこうという論調があることも事実である。しかし、それによって本当に問題は解決するのだろうか。

もはや地域活動にいかに参加してもらおうかという問題設定では、より望ましい地域社会を作り出していくことは難しいのではないかと思われる。世代によって地域社会への関心、活動の状況が大きく異なる現状において、いくら回路をつくったからといってすぐに地域活動が活性化されるとは考えにくい。

今、必要なことは、これからの地域社会の存在意義やあり方について、根本からの議論とそれに基づく各世代の合意が必要なのではないかと思われる。現在の地域社会のおかれている状況というのは、世代

によって地域社会のあり方についての認識が大きく異なっているということである。単純化すれば地域活動を高齢者は積極的におこない、中年世代が仕方なくおこない、若年世代はやらないといった世代間の意識格差が発生している。地域に愛着を持つ多くの若年世代と一緒にあって、地域社会のあり方について共有し、中年世代、高齢世代の意識といかにしてすりあわせていくのかということが重要であろう。

近年、特に経済面における世代間格差が重要な課題となっている。それは年金問題に見られるように、若年世代にとっては、「なぜわれわれが高齢者のために」という不満と不公平感があるに違いない。地域社会のあり方についても、そうした面があるかもしれない。そうであるならば、いかにして世代間格差を調整し、地域全体が満足できるような仕組みを作り出していくかが重要な課題と考えられる。そのためは、単に地域住民の自主性にまかせるだけでは、解決は難しい。行政やNPOなどが媒介となることで、世代間の意識や活動のずれを埋めていくことが必要になるに違いない。

インターネットの発達によって、場所は重要な問題ではなくなってきた。しかし私たちが、身体を持った実在する個体である限り、場所を必要としている。ある場所に住み、その場所は生活の中心におかれるはずである。それが地域社会とつながっているかは別の問題ではあるが、地域社会という場が重要であることに代わりはない。現在、犯罪や災害に対する備えのシステムとして、地域社会が注目されている。しかし私たちは結局は場所から自由になることはできないのだとすると、単に役に立つ、役に立たないという視点からのみ地域社会を考えるのではなく、私たち自身の生活全般にとって地域社会がどのような意味や可能性を持っているのかについて、考えてみる必要があるのではないだろうか。

\* 本稿は、『長野県の郷土と文化—第3回「郷土と文化に関する調査」報告—』（八十二文化財団）の「まとめ 地域と世代」を一部改変したものである。

【注】

- 1) 例えば、『地域開発』（vol.513）では特集として「地域間格差を考える」、『RP レビュー』（2007年7月号）（日本政策投資銀行）では特集として「地域格差の諸相」が組まれており、学問的、政策的にも大きな関心を集めている。
- 2) 詳しい調査結果については、『長野県の郷土と文化—第3回「郷土と文化に関する調査」報告書—』（八十二文化財団）を参照。
- 3) 地域活動と世代の問題については、これまで高齢者については、金子（1990）、内閣府（2003）などにおいて、これまでも取り上げられてきた。しかし、若年と中年、高齢者の間の違いについては、十分に取り上げられてきたとは言えない。
- 4) 地域を10地域ではなく4地域にしたのは、本調査のデータのサンプル数では10地域での分析を十分におこなえるだけのサンプル数がないからである。

【文献】

- 浅野智彦編. 2006. 『検証・若者の変貌—失われた10年の後に—』 勁草書房.
- 岩崎正弥. 2005. 『中山間地域におけるソーシャル・キャピタル（地域力）調査報告書』 愛知大学中部地方産業研究所.
- 金子勇. 1990. 『高齢者の都市地域集団関係』 倉沢進・秋元律郎編 『町内会と地域集団』 ミネルヴァ書房: 109-128.
- 小林良彰編. 2005. 『地方自治体をめぐる市民意識の動態』 慶應義塾大学出版会.
- 本田由紀・内藤朝雄・後藤知智. 2006. 『ニートって言うな』 光文社.
- 宮川公男・大守隆編. 2004. 『ソーシャル・キャピタル—現代経済社会のガバナンスの基礎—』 東洋経済新報社.
- 村山研一・渡邊勉編. 2006. 『地域活動と住民意識に関する穂高町民調査』 信州大学人文学部社会学研究室.
- 内閣府経済社会総合研究所編. 2005. 『ソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書』
- 内閣府政策統括官. 2005. 『高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果』

（受稿日 2007.10.30 掲載決定日 2007.10.31）

（わたなべ・つとむ／信州大学人文学部）

## Community and Generation

Tsutomu Watanabe

### 【Abstract】

In this paper, I will clarify regional and generation differences of a local activity and consciousness. As a result of analysis, about the regional difference, the spatial differences of the activity and consciousness are small but the differences on regional scale are large. Furthermore, about the generation difference, it is clear that community consciousness and activity are different depending on the generation. Especially, the difference between young generation, middle-aged generation and senior generation are large. Then, I examined the cause of the gap between the activity and the consciousness. As a result of analysis, the difference of life stage produces the gap between activity and consciousness of community. Finally, based on this analysis, I consider the community of the future.

Keywords and phrases community, generation, gap between consciousness and activity